
白い魔女と黒い魔女

Michel

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い魔女と黒い魔女

【Nコード】

N8225E

【作者名】

Michael

【あらすじ】

その白い洋館は、小学校の通学路にある空地に、一晩のうちに建ててしまったようなのです。工事がいつ始まったのか、いつ終わったのか。誰がそこに住んでいるのか……知っている者は誰もいません。ただ、三人の子供たちだけが、その住人を知っていたのです。白い魔女と黒い魔女。そして　白と黒の不思議な猫を。

その白い洋館は、小学校の通学路にある空地に、一晩のうちに建ってしまったようなのです。

工事がいつ始まったのか、いつ終わったのか。誰がそこに住んでいるのか……知っている者は誰もいません。

館の敷地にある桐の木は、屋根を軽く越えるほど背が高く、見事な薄紫色の花をいっぱいにかかえていましたし、玄関を出た場所に建てられた西洋風の街灯は、絵本の挿絵そのままの形で、平凡な住宅街にまったく、そぐいませんでした。

だから、自然に小学生の間では、“白い洋館”は話題の的になっていたのです。

そこに二人の主がやってきたのは、

爽やかな5月の朝と、

まだ、肌寒い5月の夜。

実は、館の窓に伸びる桐の枝に身を隠しながら、主たちも、もの珍しそうに小学生たちを眺めていたのです。

「スイートチョコをたっぷり溶かしたアーモンドチョコクッキー、果実の蜜をふんだんに生かしたアップルパイ、そして乳成分100パーセントのミルクティー。本屋で見つけたお菓子のレシピを上から順に作ってみたの。せっかく、上手く出来たんだから、あの子たちに、ご馳走したいわ」

「子供にお菓子？冗談じゃない。そんな高カロリーのメニューで、太らせた子供を食べる趣味は持ち合わせていないよ」

「また、そんな事を言う。子供たちは可愛いわよ。特に笑った顔は素敵よ」

馬鹿げてる。子供は黒魔術の生贄か、生き血をすすると決まってる

信じられない。そんな言葉は白魔術の魔法書には有りもしない。

「あんたとは気があわない」

「お互い様だわ」

窓辺から、ぷいっと顔を背けた白いストールの女性。

テーブルに並んだお菓子の皿に、そっと銀の蓋をすすると、彼女は少しきつい口調でこう言いました。

「学校が終わったら、私は、あの子たちと、一緒にお菓子を食べるの。もう、決めたんだから、あんたは邪魔しないでね」

にゃあああ

けだるそうな声をあげて、

テーブルから飛び降りたのは、夜のような瞳をもった漆黒の猫でした。

あの街灯に灯がともるまで、あんたは好きにすればいい。

でも、覚えておきなさい。夜が来たならば、それは、私の時間なのだから。

* *

午後三時

水晶玉が3人の子供の姿を映し出した時、白魔女の浅葱色の瞳が明るく輝きました。白魔女は、水晶玉に手をかざすと“白の呪文”を唱えました。

それは、人と物を喜び迎える時に使う、意味のない言葉。

さあ、お菓子をお皿に盛りつけましょう。
紅茶を温めなおしましょう。

“白の呪文”の効果は絶大で、この洋館の扉の前まで来た子供たちは、呼び鈴を鳴らさずにはおられなくなってしまったのです。

3人の子供の名前は、

風太、林子、火山。

風太と林子は双子の兄妹で、小学4年生、火山は彼らの弟で小学1年生です。

噂の白い洋館の前で、誰かに手をひかれた気がして、林子が急に足を止めた時、

「何だよ？」

そう問いかけたものの、すでに風太の視線は洋館の扉に釘付けになっていました。

扉の呼び鈴を鳴らして。早く鳴らして。

頭の中に、かすかに聞えてくる声。風太と林子は何かに引きつけられるかのように、白い洋館の扉に手を伸ばしました。

ところが、

「風太、林子、駄目だよ！」

弟の火山が出した大声が、二人の足を止めたのです。

口元をへの字に曲げた、火山の顔が水晶玉に映し出された時、白魔女は、えっと目をみはりました。

そんな事って……あの子には“白の呪文”が効かないの？

白魔女は、深くため息をつく、仕方なさに2階の部屋から階下に降りてゆきました。

「駄目だったら、駄目！その館に入っちゃあ」

「ちよつとだけ、ちよつと中を覗いてみるだけ」

しつこく袖を引っ張ってくる火山の手を、林子がふりはらった、ちよつとその時、

「あら、かわいいお客さん。中へどうぞ。ちよつと、お菓子を焼いたところなの」

なんとも言えない香ばしい香りと共に、白い洋館の扉がふわりと内側に開いたのです。

白のストールの女性。薄茶色の髪、浅黄色の瞳。外国の人？にしてみれば話す言葉はよどみのない日本語で、少しもちぐはぐしたところがありません。風太は、扉の向こうの春風のような笑顔に目をやっ

て、ぼうつと顔を赤らめました。

「駄目っていうのに！」

けれども、火山の言葉を見殺しして、吸い込まれるように、風太と林子屋敷の中に入って行ってしまいました。

「何も悪さをするわけじゃない。一緒にお菓子を食べたいだけ」
すると、諫めるようにつぶやく白魔女を、火山が鋭く睨めつけました。

「誘拐犯、泥棒っ！」

そんな悪態をついてくる火山に、白魔女は思わず目を丸くしてしまいました。

「その“への字”に曲げた口元を元にもどして、あなたも中に入っ
て。そうすれば、私は誘拐犯でも、泥棒でもないことが良くわかる
から」

白魔女は、鈴のような声音で笑うと、玄関でふんばっている火山
の手を引き、白い洋館の扉をそっと、音をたてずに閉じました。

* * *

ミルクティーのいい香りと、甘くて口の中にとろけるチョコの味、
そして風通しのいい、気持ちのいい部屋。

魔法の力がなくなつて、そんな場所に招かれてしまったのです。
さすがの火山でも、一時、休戦を決め込まないわけにはゆきません。

ふんわりと過ぎてゆく、白魔女と子供たちの午後のひと時。

ところが、

「ふん、何を楽しげに！本当に馬鹿げてる」

窓辺でその様子を眺めていた猫が、黒い吐息を吐きました。

五月蠅くて、わがままで、何を考えてるかさっぱりわからない厄介な連中。おまけに頭が悪いくせに、変に敏感。

漆黒のその猫　黒魔女には、人間の子供ほど、勘にさわるものはありませんでした。

とつとと、夜がくればいい。そしたら、あいつらを根こそぎ飲み込んでやれるのに……

不満げに、白い洋館のリビングを見下ろした時、黒い猫は突然、笑いのようなかすれた声をだしました。

白い洋館の壁が少しずつ、ずれ始めている事に、黒魔女は気づいてしまったのです。とろけるように崩れてゆく、窓枠そして、柱。あまりにも微妙なその動きは、ナメクジが草の上を這うように、ゆっくりとした速度でなされてゆくのです。

「あの一番チビの子供。なかなかおもしろい事をする」
そして、漆黒の猫はそそくさと窓辺から、外に向かって飛び降りてゆきました。

*
*

「駄目っ！その紙を剥がしてはっ！」
いつ、そこに潜りこんだのでしょうか？護符のような紙を手についた火山をテーブルの下に見つけると、白い魔女は大慌てでその体を、自分の方へ引き寄せました。

その魔方陣の紙を剥がしてしまつては、この洋館を形作っている魔力の効力が消えてしまう。

よくよく見てみると、火山の手には数枚の同じような魔法陣を描いた紙が握られていました。

「この家、変だよ。あっちこっちの壁にこの気色の悪い絵の紙が貼られてるんだ」

「だから、全部剥がしたの？駄目よ！それは、この屋敷のお守りなんだから」

貼ってしまった後に、普通の子供に見えるはずがない魔方陣の紙をよくも全部、見極めたものだど、白い魔女はため息をもらしてしまいました。

その時、時計が4時の鐘を鳴らしました。

仕方がないわ。子供たちに気づかれないように外から魔方陣を作り直しましょう。でも、術を完成するには多少、時間がかかるのよ。

けれども、楽しげな子供たちを、帰すにはまだ、少し早いような気がして白魔女は、

「私は用事で出かけるけど、4時半になったら、あなたたちは帰りなさい。鍵は開けておくれ、閉める必要もないから」

すっかり満腹で林子とトランプゲームを始めていた風太は、ちょっと困った顔をしていました。

「それで、大丈夫なの？勝手にここで遊んでいてもまだ、いいの？」

「ええ。ただ、時間はちゃんと守ってね。私は途中で用事を抜けないから、声をかけてあげる事ができないの」

一旦、魔法陣を組みだすと、白い魔女には外界の音も様子も何もかもが聞こえなくなります。それほど、その術には集中力が必要な

のです。

多少無理をして、笑みを作ると、白い魔女は大急ぎで館から出てゆきました。

「あと、30分か。俺、さっきから、このでかくて、ふわふわのソファでごろんってなりたかったんだ！」

「私もっ。ちよっと遠慮してたけど、今、やつちゃおう！」

風太と林子は、リビングのソファに飛び込むように、転がり込みました。

「あつ、僕も僕も！」

火山も二人の中に割り込みました。三人は子猫のようにじゃれ合っ
て、ソファの中ではねたり、飛んだり、転がったり。お互いの暖かさとソファのふわふわ感が、心地よくてたまりません。

けれども、午後六時。

白い洋館の前にある街灯に明かりが灯る頃、

“ 4時半になったら、帰るのよ ”

風太、林子、火山の3人の子供は、白魔女のその言いつけを守る事などすっかり忘れて、疲れ果て……

洋館のソファの中で、ぐっすりと眠り込んでしまったのです。

* * *

まだ、肌寒い5月の夜が足音をひそめながら、白い洋館に近づいてきました。なぜだか、今日はいつもより日暮れが早いようで、外は午後六時には、暗すぎるように思えました。

空には月も星も出ていません。ただ、目を凝らして見ていると、洋館にそびえたつ桐の枝の間をぬって、レースの黒いシヨールを大きく広げながら空を横切る、黒魔女の姿がおぼろげに浮かんでくるのです。

“さあ、夜の時間。甘ったるいおしゃべりや、我慢できない馴れ合いを、全部闇に流してしまおう。ああ、それを考えるだけで、私は嬉しくてたまらない”

黒魔女は、氷のような微笑を浮かべると、シヨールをつぼめて白い洋館の窓辺に降り立ちました。

「風太、火山、起きてっ、大変っ！もう六時よ」

ソファの上で目を覚ました林子はあせって、時計に目をやりました。白魔女との約束では4時半にはこの館を出るはずだったので、おまけに外はいつものその時間より、ずっと暗くて何だか嫌な感じがしてきました。

「早く帰ろう。あの女の人かもどってくる前に」

たたき起こした兄弟たちをせかしながら、林子は洋館の扉を開きました。ところが……

「嫌っ、僕はここから外に出るのは、絶対に嫌っ！」

火山が、そう叫んだのです。

一瞬、驚いたように火山の方を振り返った風太と林子。でも、すぐに火山が叫んだ同じ言葉が、二人の心にもわきあがってきたのです。

外は月も星もない暗闇。明かりといえば、玄関の向こうに灯る街灯の光だけ。景色はいつもの通学路となんの変わりもありません。でも……

暗い夜道を歩いている時、何かが後からついてくる。闇の中に何かがいて、自分をじっと見つめてる。

その数万倍も不安な感覚に三人はとらわれてしまったのです。

「そういえば、ここらあたりって昔、昔の戦争で何人も人が死んだんだって……。通学路の途中にある慰霊碑は、そのためなんだって」

うめき声が響いてくる。空が燃える。血が流れる……。

考えれば、考えるほど、三人は怖くてたまらなくなってしまうました。

そんな3人の様子を黒魔女は、笑いを堪えながら、窓辺から眺めていました。

“もつと、もつと、不安になれ。洋館の外の闇を踏みしめろ。その1歩がなされた時、この黒魔女がお前たちを、恐怖の世界へ攫ってゆく”

* *

「でも、いつまでもここににいるわけにもゆかないし……」

風太が、おびえながらも玄関から外を覗いた、その時です。

外にあった街灯の光が、いきなり強く瞬き始めました。そして、その光がつくる街灯の影がすうつと長く、洋館の玄関に向けて伸び始めたのでした。

“その街頭の影を通ってこっちへ来て！”

風太、林子、火山の三人は、頭に響いてきたその声に目をぱちくりとさせました。

「今の声、誰？」

互いに顔を見合わせると、三人は同時に、街灯の下で、彼らをじっと見つめている白い猫に目をやりました。

まじりけのない白、澄んだ浅葱色の瞳。それが、やけにはつきりと、姿が闇にうかぶあがっています。

“この夜の中で、黒魔女の魔法を遮れるのは、街灯の影が長く伸びて作った細い道だけ。だから、あなたたちはその上を歩いて、私の元までいらっしゃい。けれど、一歩たりとも、道はずれてはならない。さもなくば、黒魔女の世界に引きこまれてしまうから”

どきどきと三人の心臓は高鳴りました。やはり、この声の主は街灯の下の白い猫のものようです。

“夜の時間では、私の呪文の効力は長くは続かない。だから、急いで！その道を渡って！”

とまどっている場合ではありません。闇はどんどん三人に迫ってくるのです。

「風太、先にいってよ」

「ええっ」

「だって、お兄さんでしょ」

“林子と僕は同じ年じゃないか”と唇をとがらせながらも、風太は、勇気をふりしぼって、街灯の影を踏みしめました。そして、林子、火山がそのあとに続きます。

胸を押しつけるような重苦しい風が子供たちの頬をかすめてゆきます。

夜ってこんなに怖いもの？

安全な道は、子供一人がやっと通れるだけの幅しかない街灯の影の上だけ。

やっとの思いで、街灯の下にいる白い猫の元へたどり着いた時、風太と林子は心の底から安堵の息を吐いたのです。

“良かった。あとはあのおチビさんだけね”

ところが、

「火山っ！！」

一番、後ろにいた火山が何かの拍子につまづいて、転んでしまったのです。街灯の影を大きく外れて、火山は闇の中に放り出されてしまいました。

“やった、やった！白魔女に邪魔はされたけど、この子一人でも、連れてゆければ、それで上等！”

黒魔女は喜びいさんで、腰のショールを大きく広げました。すると、闇はいつそう濃く深まり、唯一、明るく照っていた街灯の灯さえも、翳りだしたのです。

その時です。

痛そうに膝を押さえた火山が急に、顔をあげ、きつとした目で空を睨めつけました。

すると……

緑色の月が夜空にこうこうと、輝き出したのです。

火山を今にも、闇にとりこもうしていた黒魔女は、うつと一つ唸り声をあげると、かき消すように姿を消してしまいました。

“早く、こつちへ来て！”

白い猫は、たまらず火山の方へかけよって行きましたが、月の光に形作られた火山の影を見て、一瞬、身をこわばらせました。

頭には二本の角、背には大きく広げられた蝙蝠の翼。

“……魔王、ルシファー？！大天使ミカエルの双子の兄……そんなあなたはどうして、こんな所にお隠れになっっているのです？”

平凡な夜がもどってきました。風太、林子、火山は家々の明かりが灯る住宅街の道をしっかりと手を繋いで家路を歩いてゆきました。
「不思議。さつき、あんなに怖かった夜の景色がちつとも怖くない」

きつと、ソファで眠っていた時に夢を見たんだ。

風太と林子は、同時にそう思い、心の中で頷きました。

「おい、やめろよ。歩けないじゃないか！」

急いで二人の後をついてゆこうとする火山の足元で、白い猫がからみつくように、ぐるぐると廻っています。

“深遠なる魔王よ。まだ、この子の力は大きくはない。だから、その力を封印する事をお許し下さい。でも、この子供の中にお隠れになったあなたは、この子が大きくなった時、この街で何をしようというのですか？”

やがて、この街に魔王が降臨する日が来るというのか……けれども、そんな悪い予感はいらない。大天使ミカエル……あなたはどこにおいでです？この子のそばに強く感じるあなたの余韻が、私の不安をとりさってゆくのです。

次の朝、白い洋館は、かきけすように、その姿を消していました。
工事がいつ始まったのか、いつ終わったのか。……知っている者は
誰もいません。

ただ、三人の子供たちだけが、その住人を知っていたのです。

白い魔女と黒い魔女。そして 白と黒の不思議な猫を。

く完く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8225e/>

白い魔女と黒い魔女

2010年10月12日03時10分発行